

博物館学課程開設30周年を迎えて

著者	濱瀬 善雄
雑誌名	阡陵：関西大学考古学等資料室彙報
巻	23
ページ	14-15
発行年	1991-05-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024248

博物館学課程開設30周年を迎えて

濱 瀬 善 雄

末永雅雄先生（関西大学名誉教授）が、文化勲章を受章されたのは、昭和63年11月のことであった。受章の知らせがあった際に、「みんなにすまんなあ。」「考古学を築いた先達、早く死んだ同期生、現在活躍中の人たちを代表していただいたようなもの。」と喜びの表現はあくまでも律儀だった。と新聞が報じていた。

私は図書館より、お祝いのことばを述べるため、狭山のお宅を訪問した。その際、いろんな回顧談に花が咲いたが、やはり、関西大学文学部教授として在職された時代に話題が及んだ。私は、文学部の事務室に勤務している間、末永先生には大変お世話になった。文学部史学科は、考古学に関する授業は末永先生が中心となっていた。昭和29年に末永先生のご尽力によって、元毎日新聞社社長、本山彦一氏の旧蔵資料のうち、図書1,000余冊は図書館が受入れ、考古学資料約10000点は考古学資料室に収蔵されていた。その後、高松塚、藤の木古墳などの発掘には本学の学生が網干教授の指導の下に発掘に従事した。それと同時に資料も増加し、現在は13,000点に達している。

博物館法は昭和26年12月に制定され、それに伴い「博物館には専門職員として学芸員を置く」とし、「学芸員は博物館の資料、展示、及び調査研究、その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどること」と定義づけられた。その当時、関西大学では博物館課程は設置されていなかった。昭和35年の秋に、文学部教授会において博物館学課程を設置することがはかられ、末永先生に私がお供して、文部省社会教育課を訪問することになった。末永先生のご親戚に当たられる菊井維大教授の立教大学法学部研究室にお伺いし、当時菊井先生は文部省の大学設置審議会の委員をされていた関係上、文部省との折衝のノウハウをお教えいただいた。社会教育課において担当係官は末永先生を大変よく存じており、関西大学が博物館学課程がまだ設置されていないのが不思議だということのような感じであった。一般論として学芸員の乱造を

いましめる話があった。その時、係官が関西大学は末永先生がおられるので大丈夫であるとのことばがあった。末永先生のお考えも同じであり、大いに同感された。

昭和35年12月20日に申請を行い、昭和36年4月に博物館学課程の設置が認可され、國學院大学などの先輩大学他の実情を調査して、特に博物館実習については、バラエティに富んだカリキュラムが組まれた。第1期生は選考の結果、大学院生2名、4年次生5名、3年次生4名、聴講生5名計16名でスタートした。私も担当者として、末永先生、小野勝年講師と共に色々お手伝いをさせていただいた。博物館実習においては、天理参考館などを訪問して、天理教の宿舎に泊まったこと、東京方面の実習（東京国立博物館など）にも参加させていただき、末永先生を中心として第1期生は和気あいあいの中、厳しい指導がなされたことが眼前にほううつされる。結局16名中13名が学芸員の資格を取得した。受講生の中で今、各分野に活躍されている方々を紹介すると、石野博信氏（奈良県立橿原考古学研究所副所長、同博物館長）亥野疆氏（八代学院大学講師）小西愛之助氏（大阪芸術大学教授）岡幸二郎氏（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館総括学芸員）猪熊兼勝氏（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館学芸室長）角田芳昭氏（考古学等資料室主任）であった。当時は本学の学芸員を権威あらしめるために資格単位取得申請者は末永、小野両先生の書類選考によって始めて資格申請が出来るというように厳選されていた。博物館学課程が開設されて、30年が経過した。末永先生のあとを受けて、網干善教文学部教授が指導を続けられ、昭和36年より平成2年までの学芸員の資格取得者は1,088名に達した。現在学芸員養成講座を開設している大学は、国公立大学で約130大学にのぼり、毎年3,000人以上を上回る有資格者が社会に出て行っている。

近年は博物館ブームの気運にのって、特に地方自治体の首長が「地方の文化」をアピールす

る一つの手段として、博物館建設が一つの流行になっている。昭和62年のデータであるが博物館・園の設置数は2,574館に達している。アンケート調査（博物館研究 Vol. 23 No. 8「博物館芸員の実態」）によると回答1,263館の中、学芸員0名が412館あるという事実である。学芸員の資格は図書館の司書の資格と同様、大学卒業に際して、取れる資格は取得しておこうという考え方が強く、博物館・図書館へ就職する人は非常に少ないのが実情である。

しかし、こうした資格はあくまでも基礎資格であるという考え方であって、各自が一つの専門分野をもってその知識を深めていくことが必要である。学芸員においては、資料収集、保存、管理、調査、研究、教育、普及活動などを行うことになっているため、学芸員として勤務する中で経験を積み重ねながら修得していかなければならない。専門分野のスペシャリストになることが必要である。ということは、博物館学芸員も図書館司書と同様、資格はあくまでも基礎的な知識の修得というレベルである。現在では、大学院修士課程修了以上の学力が要求されている。

博物館においては、常設展の他に特別展という企画展が年間行事として開催されているが、一つのテーマのもとに陳列、解説、目録作成という手順によって所蔵資料だけでなく、他の博物館より資料を借用して展示が行われている。これに伴って、学問の専門性は益々細分化されつつある。さらに、博物館においても、コンピュータが導入され、コンピュータによる資料の登録、管理、検索などが行われてきた。そのためには、学芸員自らが勉強して、システム設計を行い、データの入力、検索が必要となる。国立民族学博物館において導入されている、文献情報検索システムは図書館のシステムと共通している。図書、逐次刊行物、貸出の各サブシステムが開発され、検索のためにJP/MARC、LC/MARCが活用されている。特徴的なものには、標本資料ライブラリーシステム、映像資料ライブラリーシステムが挙げられる。資料が立体的なものであるため、このようなシステムが必要となっている。それには、コンピュータに関しての人材育成が必要となる。しかも、学芸員が自らシステム設計して運用し、改善をやる

必要があることであろう。更に、データ量は必ず無限大に増加していくものだから、その要量の問題が問われている。

平成3年4月1日にオープンした姫路文学館は、近年の文学館ブームにのって、郷土出身の歴史学者、文学者の原稿、書簡、遺品、著書を収集して整理、保存に当たっている。この文学館では司書が採用されているかは定かではないが、テレビの紹介画面では学芸員が運営について説明を行っていた。図書・原稿などを平面的に並べるだけでなく、文学者の執筆環境の再現などをおこなっている。また、映像や音響などによる解説に力をいれている。司書でなく学芸員ということは、文学館としては、資料の整理よりも展示の方にウェイトが置かれているのであろうか。

今後、博物館・美術館・動物園・水族館・文学館・図書館という個別的な考え方は薄れる方向にあるのではないだろうか。要するに学芸員・司書に共通するものは、その専門性の追求にあるということは、はっきりしてきたことである。しかも、これらの施設に更に共通する点は、利用者あつての施設である。利用者がその館に何を求めているかについて、そのニーズを把握する必要がある。博物館等において、常に展示物についての新しい方策が展開される努力がなければ、また図書館において利用者のニーズに即応する蔵書構成と、サービスがなされないと、いずれも利用者から見放されることに気付くべきである。

本学考古学等資料室も来年度を目指して「博物館相当施設」として大阪府教育委員会に申請を計画されており、博物館学課程において、ニューメディアの知識を導入するなど、新しいカリキュラムが取り入れることが急務であると考えている。

5月7日、この原稿の校正をしているとき、ふと思いついて末永先生の著書『常歩無限』を読みかえしていた。その時、テレビニュースが先生が死去されたことを報じた。先生が何か私に話しかけられたように感じた。こゝに先生のご冥福をお祈り申し上げます。